来迎院如来蔵所蔵の『相好集』について

南部忠明・河野敏宏

目次

一、はじめに（本稿の目的）
二、『相好集』の特徴
三、『相好文字抄』と『相好集』との関係
四、『相好文字抄』と『相好集』の撰述背景
五、結語

一、はじめに（本稿の目的）

前稿において来迎院如来蔵所蔵の『相好文字抄』がいかなる典籍であるかについて述べた。[1] ところで来迎院には『相好文字抄』と類似した名称をもつ『相好集上』（以下、『相好集』と略称する。ちなみに「下」は所蔵されていない。）という典籍が存在する。その名称の類似性からすれば、両書には何らかの関係がある可能性もある。本稿においては、『相好集』の内容に言及し、『相好文字抄』と本書との関係について述べる。

なお、今回の研究にあたり、来迎院御住職、齋藤孝圓氏のご厚意によって、筆写および調査を行うことができた。記して深く感謝申し上げる。

二、『相好集』の特徴

まず『相好集』の概略を紹介する。[2]

『相好集』の奥書には、

相好集上　一交了　願以此功德。普及於一切。我等与衆生。往生安樂國。面見阿弥陀佛相好荘嚴身。及十方諸佛妙色身。皆聞正法亦見功德身。妙法身。佛子運覺　大治四年九月十日午剋書了　執筆　暹胤　一交了　三郎丸（注：三郎丸は別筆）

とある。これによれば大治四年（一一二九年）の書写であることが分かる。願主は佛子運覺であり書写者は暹胤ではないかと思われる。ただし、撰者が佛子運覺であるとまでは、現時点では、確定できない。[3]

『相好集』の冒頭は次のような記述ではじまっている。（出典注は【　】で示した。）

【智度論第廿九云】如般舟三昧中説。菩薩入是三昧。即見阿弥陀佛。便問其佛何業因縁。故得生彼國。佛即答言。善男子。以常脩念佛三昧憶念不廢故得生我國。問曰。何者是念佛三昧得生彼國。答曰念佛者。念佛三十二相八十随形好金色身。々出光明遍満十方。如融閻浮壇金其色明浄。又如須弥山

王在大海中。日光照時其色發明。…以下略…

『智度論』とは『大品般若経』の注釈書である『大智度論』を指す。この条文においては、念仏について「念仏とは、仏の三十二相八十随形好の金色身を念ずることであり、仏の身より出た光明は遍ねく十方に満ち、閻浮壇金をとかしたようで其の色は明浄である」等と述べており、阿弥陀仏の三十二相八十随形好を念仏することによって功徳が得られることが説かれている。このような記述を冒頭に掲げている点から、『相好集』は「阿弥陀仏をはじめとする諸仏の相好すなわち三十二相と八十随好を念じる」ことの重要性を認識し、その上にたって撰述された典籍であることが分かる。

このことは『相好集』という書名や前述の奥書部分にもあらわれている。奥書にみえる「相好荘厳身」とは「業報仏と同じで、業報として三十二相・八十随好をもって現れる仏のこと」である。(4)

本書の特徴をさらに説明するため、前掲の「智度論第廿九」から引用された部分に続く本書冒頭部分を出典ごとに改行して例示する。(《　》は割り注。〈　〉は小文字。)

【大般若経第三百八十一云】善現。云何如来應正等三十二大士相。善現。世尊足下有平満相。妙善安住猶如奩底。地雖高下随足所蹈皆悉坦然无不等觸。是為第一。《【栖復】云問下第六十八好其足去地四指量如何名等觸。答只去地四指量而有印文。亦名等觸下。八十好初佛本相。合去地四指。今此初示相教化衆生説實語者地色。》

【无上依経下巻云】足下平満。所履踐地悉皆平夷。稱菩薩脚无有坑埳〈相〉

【瑜伽論第四十九云】一者足善安住等案地相。〈相〉

【大乗百相(ママ)荘厳相経云】廿七者兩足掌下皆悉平満相。〈相〉

【觀佛三昧経第一云】如来足下平満不容一毛。

【智度論第五云】一者足下安平立相。足下一相。着地間无所受不容一針。〈相〉《此巻中引迦旃延子説太子時相也。自下餘相皆唯知之。》

【十住毘婆沙論第六云】足安住不動。名足安立相。〈相〉

……（中略）……

【尼乾子経偈云】瞿曇胸相滿亦如師子坐〈好〉

このような本文を有する本書の特徴をあらかじめまとめて述べれば以下の三点である。

(一) 仏の身体的特徴を諸経典から引用して各々の特徴毎に分類した典籍である。

(二) 文末に〈相〉〈好〉の注記がなされていることが多い。

(三) 三十二相と八十随好の身体的特徴がすべて採録されているわけではない。

これらの点について以下詳述する。

(一) については、以下のようである。

右に示した例では、『大般若経』、『无上依経』、『瑜伽論』、『大乗百福相荘厳相経』、『観佛三昧経』、『智度論』、『十住毘婆沙論』などから、例えば「足善安住等案地相。（世尊の足の下が平坦であり善く安住すること（瑜伽論））などのような「仏の足」に関わる特徴を引用し、これらが一つにまとめて記載されている。

（二）については、以下のようである。

各条文の末尾には〈相〉あるいは〈好〉という注記がある。〈相〉は三十二相、〈好〉は八十随好を指しており、当該注が三十二相のものであるか八十随好のものであるかが明確に分かる。

（三）については、以下のようである。

実は、三十二相と八十随好の引用に際しては、その引用方針が『相好集』の本文末尾に以下のように示されている。

已上三十二相八十随好竟。三十二相盡大般若経第三百八十一、瑜伽論第四十九之所説。八十随好、但盡大般若之所説、其餘経論所説。相好並撮要耳。（同書三百七十九行目～三百八十一行目）

この記述によれば、『相好集』においては、三十二相は『大般若経』巻第三百八十一や『瑜伽論』第四十九から採録し、八十随好は『大般若経』や他の経典から引用していることが知られる。ただし「撮要」とあることから分かるように、必ずしも三十二相八十随好の特徴のすべてを引用しているわけではない。

例えば、「手足柔軟相」「手過膝相」なども三十二相の一つであるが、このような相好を『相好集』は記載していない。つまり、相好の全ては記載されておらず、取捨選択が行われているということである。

以上をまとめると、『相好集』とは、阿弥陀仏をはじめとする諸仏の相好に関する記述を諸経典から集めて分類して列挙した、一種の「アンソロジー」とでもいうべきものであると考えられる。

三、『相好文字抄』と『相好集』との関係

ところで、前稿で述べたように、来迎院には『相好文字抄』なる典籍が所蔵されている。

同書は、『相好集』と同様「相好」を扱いながらも、各種小学的な注を加えた「仏典辞書（特に相好語辞書）」的性格を有しており、その性格は本書とは大きく異なっている。しかし、両書の包紙や奥書きを比較すると、次のように、両者には何らかの繋がりがありそうな点が見出される。

（一）『相好集上』、『相好文字抄下』とあるように、書名のよく似た両書が相補的に上・下と記されている。

（二）ともに大治四年書写であって、しかも書写の終了月日が一日違いである。[5]

では、両書の相好語やその掲載順序にも何らかの関係がみられるのであろうか。

次に掲げる〈表A〉は、『相好文字抄』に記載されている相好語が『相好集』ではどのように記載されているのか、さらに、当

該の相好語が『相好集』においてどのような順序で出現するのか、を調査してまとめたものである。

『相好文字抄』の「序数」「引用経典名」「相好語」の項目については、前稿の〈表一〉を参照。『相好集』の「序数」は、相好について述べた引用文の出典ごとの序数である。ひとつの序数の出典からの引用文の中に複数の相好語が含まれる場合もある。例えば、『相好集』74番「大般若経云」の引用文の中には、「喉脈」「延縮」「癰曲」「呑咽」「津液」「身心適」の六種の相好語が含まれており、これらの相好語は『相好文字抄』の48番〜53番の相好語と一致している。ちなみに、これらすべてを合わせたものが「第二十五相」である（是二十五）。序数に付した＊については後述する。「引用経典名」の項目には各種相好語を含む引用文の出典名を記した。「同経云」のように固有名を挙げていない出典注については、例えば、「同経（觀佛経）云」のように具体的な経典名を補った。「相好語」の項目にはその経典から引用された引用文を示し、当該相好語には太線を付した。また、『相好文字抄』記載の相好語に該当する相好語が『相好集』に記載されていない場合には×を付した。

〈表A〉

相好文字抄			相好集		
序数	引用経典名	相好語	序数	引用経典名	相好語
1	大般若音訓云	相好	×	×	×
2	大般若経云	有白毫相	184＊	大般若経云	世尊眉間有白毫相。右旋柔軟如覩羅綿。鮮白光浄逾珂雪等。是三十一。
3	大般若経云	如覩羅綿			
4	大般若経云	逾珂雪等			
5	无上依経云	右旋上靡	×	×	×
6	六波羅蜜経云	婉轉右旋	×	×	×
7	六婆羅蜜経云	頗胝迦宝	×	×	×
8	大般若云	光潔晃曜	×	×	×

9	同経（大般若）云	金臺	×	×	×	皆於中現了了分明。於圓光上有金色艶。如摩尼珠嚴顯可愛。……其光赫奕琉璃頗梨。備七寶色從佛足趺。副稱佛身如摩尼珠。亦如前光上至圓光。……一々菩薩。其頂上生摩尼珠光。……
10	同経（大般若）云	頸及雙肩	×	×	×	
11	瑜伽論云	及項	×	×	×	
12	十住論云	両掖	×	×	×	
13	百福荘厳相経云	缺減	×	×	×	
14	尼乾子経云	高峻	×	×	×	
15	大般若云	髆腋	×	×	×	
16	大般若云	充實	×	×	×	
17	觀佛経云	摩尼珠	51＊	觀佛経第三云		
18	觀佛経云	跂腋	×	×	×	
19	同経（觀佛経）云	脇肋	×	×	×	
20	伽論（瑜伽論）云	項脊	264＊	最勝疏略頌曰〈此随好頌依瑜伽論〉		……脇腋乳為六腹脚項脊四頸已下六十鬘齶脣頤六頬目眉鼻八
21	大般若云	容儀	×	×	×	
22	同経（大般若）云	洪滿	261＊	最勝王經溜洲疏第三云		今但略明三十二相。大般若経三百八十一説。一世尊足下有安平相《乃至》世二烏瑟膩沙猶如天蓋。然與瑜伽開合有異。瑜伽開第十八洪滿端直爲身不僂曲。復開二十三爲齒無隙齒鮮白。開二十一頷臆爲二。
23	伽論（瑜伽論）云	僂曲				
24	十住論云	七肘	×	×	×	×

25	大般若云	仙王	×	×	如師子前身廣原得所故名師子上身
26	同経（大般若）云	離翳	×	×	
27	同経（大般若）云	縦廣	×	×	
28	同経（大般若）云	如諾瞿陀	×	×	
29	同経（大般若）云	頷臆	×	×	
30	十住論云	廣厚得所	19	十住論第六云	世尊身分上半円満如師子王威嚴无對。是四十六
31	般若経（大般若）云	威厳	20	大般若云	如来缺瓮骨満相。於彼相中旋生光臺……
32	観佛経云	缺瓮骨	29	観佛経云	世尊常光面各一尋。是二十二。
33	般若経（大般若）云	一尋	32	大般若経云	圓光一尋照無邊赫奕猶如百千日
34	最勝経（最勝王経）云	赫奕	43	最勝経第五讃佛偈云	具三十二相八十種好項背円光是各應身
35	同経（最勝王経）云	項背	48	最勝王経第二云	一切衆生所希見事。皆於中現了了分明。於圓光上有金色
36	観佛経云	金色艶	51	同経（観佛経）第三云	艶。……如畫如印。隨佛身轉不相障礙。鹿王蹲。鉤鎖
37	同経（観佛経）云	鉤鎖骨槃龍結			骨。槃龍結間。……其光赫奕琉璃頗梨。備七寶色從佛足
38	又（観佛経）云	副稱			趺。副稱佛身如摩尼珠。……
39	大般若云	浄蜜	52	大般若経云	世尊齒相四十齊平浄蜜根深白逾珂雪。是二十三。
40	最勝経（最勝王経）云	拘物頭華	56	最勝第十云	齒白齊蜜。如拘物頭華。
41	十住論云	君垣華	57	十住論第六云	齒白如珂雪如君垣華故名齒白相。……齒蜜緻不疎故名具
42	同論（十住論）云	蜜緻			足齒相。齒上下相當故名相。齒上下相當故名四十齒相。
43	瑜伽論云	上下齒鬘	60	瑜伽論云	上下齒鬘並皆殊妙為二隨好
44	同論（瑜伽論）云	齔腭	61	又（瑜伽論）云	齔腭殊妙為一隨好
45	観佛経云	下斷	63	又（観佛経）云	如来下斷如優曇鉢華茎色

46	大般若云	四牙		64	大般若経云
47	同経（大般若）云	鮮白鋒利			世尊四牙　鮮白鋒利是廿四《瑜伽論合四牙入齒》
48	同経（大般若）云	喉脉		74	大般若経云
49	同経（大般若）云	延縮			世尊常得味中上味。喉脉直故能引身中諸支節脉所有上味。風熱痰病不能爲雜。由彼不雜脉離沈浮延縮壞損癰曲等過。能正呑咽　津液通流故。身心適悅常得上味。是二十五。
50	同経（大般若）云	擁曲			
51	同経（大般若）云	呑咽			
52	又（大般若）云	津液			
53	又（大般若）云	身心適			
54	无上依経云	咽喉		76	无上依経云
55	觀佛経云	流注		77	觀佛経云
56	同経（觀佛経）云	適舌根上			如来舌者是十波羅蜜十善報得其舌根下及舌兩遍有二寶珠流注甘露適舌根上諸天世人十地菩薩无此舌根
57	同経（觀佛経）云	咽𦛚		84	觀佛経云
58	大般若云	能覆		86	大般若経云
59	同経（大般若）云	梵音		95	大般若経云
60	同経（大般若）云	詞韻和雅			世尊舌相薄淨廣長能覆面輪至耳髮際是二十六《上坐経大師疏云凡時舌相但覆面輪巫髮等際若作神通或覆大千或更无量》
61	又（大般若）云	洪震			世尊梵音　詞韻和雅隨衆多少无不等聞其聲洪震猶如天鼓
62	又（大般若）云	婉約			發言婉約　如頻迦音是廿七
63	又（大般若）云	如頻迦音			
64	又（大般若）云	和悅與言		107	大般若云
65	又（大般若）云	眼睫		111	大般若経云
					世尊音聲不高不下隨衆生意和悅與言是七十一
					世尊眼睫猶若牛王紺青齊整不相雜乱是廿八

66	无上依経云	紺炎	112	无上依経云	眼睫紺炎猶如牛王《相》
67	十住論云	希疏	117	十住論云	睫不希踈《好》
68	大般若云	眼睛	118	大般若云	世尊眼睫上下齊整稠密不白是卅八
69	同経（大般若）云	紺青	120	大般若経云	世尊眼睛紺青鮮白紅環間飾皎潔分明是廿九
70	同経（大般若）云	紅環			
71	同経（大般若）云	皎潔			
72	觀佛経云	俱眴	128	觀佛経第二云	佛眼青白云者過於白寶百億万倍青者勝青蓮花及紺瑠璃百億万倍上下俱眴如牛王眼
73	百福経云	紺艶	129	百福荘嚴相経云	廿一者目色紺艶如青蓮花《好》
74	又（百福経）云	婉麗	135	説無垢稱經疏……大師釋云	六根之首。目最爲先。……鮮淨喩目。修長復濶。婉麗可觀。含蘂明皎。故以爲喩。……周圍絞之。故以青紺蓮花爲喩。
75	又（百福経）云	含蘂			
76	无上依経云	眼瞼	136	无上依経云	眼瞼青好如優鉢羅華《相》
77	觀佛経云	雙眥	137	觀佛経第二云	眼雙眥頭旋生二光如青蓮華
78	大般若云	天帝弓	138	大般若経云	世尊面輪其猶満月眉相浄如天帝弓是第卅
79	同経（大般若）云	舒泰	143	大般若云	世尊顔貌舒泰光顯。念笑先言唯向不背。是五十八。
80	同経（大般若）云	含笑先言			
81	同経（大般若）云	熙怡	×	×	×
82	同経（大般若）云	頻蹙	×	×	×
83	同経（大般若）云	常少	146	大般若云	世尊顔容常少不老好巡奮處。是七十九。
84	同経（大般若）云	好巡奮處			
85	同経（大般若）云	面門	148	大般若云	世尊面門下長不短。不大不小如端嚴。是二十九。

86	觀佛經云	師子欠相	150	觀佛經第三云	如来師子欠相。佛張口時如師子王口方正等。口兩吻邊流出三光。其光金色。
87	同經（觀佛經）云	兩吻			
88	同經（觀佛經）云	丹暉	151	大般若云	世尊脣色光潤丹暉。如頻婆菓上下相稱。是二十八。
89	同經（觀佛經）云	如頻婆菓			
90	觀佛經云	髭鬢	156	觀佛經第一云	如来髭鬢如蝌斗形流出光明。
91	同經（觀佛經）云	蝌斗			
92	大般若云	且直	157	大般若云	世尊鼻高脩而且直其孔不現是三十三
93	最勝王經云	如載金鋌	159	最勝第十云	鼻高脩直如截金鋌
94	觀佛經云	當于	162	觀佛經第三云	如来鼻高脩而且直當于面門如来鼻端如鷹王嘴鼻孔流光
95	同經（觀佛經）云	鷹王嘴			
96	報恩經云	頰車	165	報恩經云	廿五者頰車方如師子《相》
97	大般若云	輪埵	171	大般若云	世尊耳厚廣大脩長輪埵成就。是四十二
98	瑜伽云	角鬢	174	瑜伽論云	角鬢兩耳並皆殊妙為四随好
99	大般若云	綺靡	175	大般若云	世尊雙眉長而不白緻而細軟是三十九《栖復云不白者无老相也》世尊雙眉綺靡順次紺瑠璃色是第四十
100	觀佛經云	擾生	178	觀佛經第三云	如来眉相左右二眉形如月初擾生諸毛希稠得所随月形轉其色艶紫毛端紺青瑠璃妙光色无与比
101	大般若云	額廣	179	大般若云	世尊額廣円満平正形相殊妙是四十五
102	大般若經云	烏瑟膩沙	186	大般若經云	世尊頂上烏瑟膩沙高顕周円猶如天蓋是三十二
103	同經（大般若）云	天蓋			
104	无上依經云	涌起	187	无上依經云	有欝尼沙頂骨涌起自然成髻《相》
105	同經（无上依經）云	成髻			

106	智論云	如捲	192	同論（智度論）第五云	世一者頂髻相菩薩有骨髻如拳等在頭上《相》 如来頂骨團円猶如合捲。其色正白。若見薄皮則為紅色。 或見厚皮則金剛色。髪際金色。腦頗梨色。《乃至》髪下 金色《乃至》是名如来生王宮中頂腦肉髻。惟其頂上五大 梵相生。時摩耶及佛姨母皆悉不見。
107	觀佛経云	合拳	200	觀佛経第一云	
108	同経（觀佛経）云	金剛			
109	同経（觀佛経）云	頂腦			
110	无上依経云	无胲	202	无上依経云	二者頂骨无頻。《好》
111	大般若云	末達那	203	大般若云	世尊首相周円妙好如末達那亦猶天蓋是六十三
112	乾子経（尼乾子経）云	繖蓋	206	同経（尼乾子経）偈云	頭円如繖蓋《好》
113	大般若云	筋脈	209	大般若経云	世尊筋脈　盤結堅固深隠不現是為第五
114	同経（大般若）云	盤結			
115	无上依経云	脈理	210	云无上依経	世六者脈理深
116	大般若云	支節	211	大般若云	世尊支節漸次円妙善安布是第十二
117	乾子経（尼乾子経）云	鉤鎖	215	尼乾子経云	四十七者沙門瞿曇骨相節連如似鉤鎖
118	无上依経云	那羅延	216	无上依経云	身鈎鎖骨如那羅延《相》
119	觀佛経云	間錯	218	又（觀佛経第一）云	如來骨色鮮白頗梨雪山不得為譬上有紅光間錯成文凝液如脂
120	同経（觀佛経）云	如脂			
121	大般若云	敦重	220	又（大般若）云	世尊身支安定敦重曾不掉動円満无壊是第十九
122	同経（大般若）云	諸竅	223	大般若云	世尊諸竅清浄円好是五十四
123	同経（大般若）云	敦粛	226	大般若云	尊身容敦粛无畏常不怯弱是第十七
124	同経（大般若）云	怯弱			
125	同経（大般若）云	庠審	232	大般若云	世尊行歩直進庠審如龍為王是為第七
126	同経（大般若）云	庠序	233	又（大般若）云	世尊行歩安平庠序不過不減猶如牛王是為第九

127	无上依経云	斜戻	236	无上依経云	行歩平整无有斜戻《相》
128	同経（无上依経）云	迴如	238	无上依経云	十一者身一時迴如象王
129	瑜伽云	轉側	243	瑜伽論第卅七云	謂佛菩薩常右脇臥如師子王。雖現安處草葉等蓐。一脇而臥曽無動乱。一切如来應正等覺。雖現睡眠而無轉側。大風卒起不動身衣。行如師子歩若牛王。先擧右足方移左足。随所行地高處便下。下處遂高担然如掌。無諸礫石塼瓦等物。
130	同論（瑜伽論）云	礫石			
131	同論（瑜伽論）云	塼瓦			
132	大般若云	四指量	244	大般若経云	世尊行時其足去地。如四指量而現印文。是六十八。
133	尼乾子経云	炳着	246	尼乾子経云	六十八者沙門瞿曇行不履地輪相炳著。
134	大般若云	随轉	239＊	大般若云	世尊迴顧必皆右旋如龍為王擧身随轉。是第十一。
135	大般若云	逶迤	247	大般若云	世尊自持不待他衛。身無傾動亦不逶迤。是六十九。
136	无上依経云	剛彊	254	无上依経云	六十九者剛彊衆生見即調善。怖畏衆生便得安樂。
137	大般若云	轉範	255	大般若云	世尊所為先觀後作。軌範具足令識善浄。是七十六。

この〈表A〉から判明した点をあらかじめまとめて述べれば以下の三点である。

（一）『相好文字抄』記載の全百三十七語の相好語の約五分の一に相当する同書冒頭の1番から29番までの相好語は、その多くが『相好集』に記載されていない。しかし、それ以降の相好語はそのほとんどが記載されている。

（二）『相好文字抄』と『相好集』の両方に記載されている相好語の、『相好集』における配列順序は、それらの相好語が多様な典籍から引用されているにも関わらず、その大部分が『相好文字抄』の配列順序と一致する。

（三）『相好文字抄』と『相好集』の両方に記載されている相好語の依拠した仏典も、そのほとんどが一致する。

これらの点について以下詳述する。

（一）については、以下のようである。

『相好文字抄』に記載されている百三十七語の相好語で『相好集』にも記載されている相好語は百十三語あり、その割合は全体

の約八十二％である。逆にいえば、約十八％の相好語は、『相好文字抄』には記載されているが『相好集』には記載されていないものである。これらの記載されていない相好語は『相好文字抄』冒頭の1番から29番のゾーンに集中している。特に、『相好文字抄』の5番「右旋上靡」から16番「充實」にいたる相好語ならびに24番「七肘」から29番「頷臆」にいたる相好語は、ひとまとまりになった状態で『相好集』には記載されていない。ちなみに『相好文字抄』の1番から29番までの相好語で、『相好集』にも記載されている相好語は七語（2番「有白毫相」、3番「如覩羅綿」、4番「逾珂雪等」、17番「摩尼珠」、20番「項脊」、22番「洪滿」、23番「僂曲」）にすぎない。これに対して『相好文字抄』の30番以降の相好語は、百八語中二語（81番「熙怡」と82番「顰蹙」）の例外を除くと『相好集』には全て記載されている。

（二）については以下のようである。

例えば、『相好文字抄』の107番から112番までの相好語に該当する『相好集』の本文においては、

【觀佛経第一云】如来頂骨團円猶如107合捲其色正白若見薄皮則為紅色或見厚皮則108金剛色髪際金色腦頗梨色《乃至》髪下金色《乃至》是名如来生王宮中109頂腦肉髻惟其頂上五大梵相生時摩耶及佛姨母皆悉不見【大般若云】世尊頂骨堅實円満是七十八【无上依経云】二者頂骨110无頻。《好》【大般若云】世尊首相周圓妙好如来111末達那亦猶天蓋是六十三【智論第八十九云】四十七者頭如摩陀那菓【尼乾子経云】一者沙門瞿曇頭相端嚴上下相稱二者沙門瞿曇頭相美滿如摩陀羅樹菓《好》【同経（尼乾子経）偈云】頭円如112繖蓋《好》

のように、多様な典籍を引用して相好語を列挙しているにも関わらず、それらの相好語は、『相好文字抄』記載順序に沿った昇順で記載されている。このように、『相好集』中の相好語の出現する順序は、一部を除いて(6)『相好文字抄』の順序に沿って昇順で並んでおり、その一致する割合は約九十五％である。特に『相好文字抄』の30番以降の相好語に限れば、その順序は、わずか一例（134番「随轉」）を除いて『相好集』の相好語の記載順序と極めてよく一致する。

それに対して、『相好文字抄』冒頭の29番までの相好語に該当する『相好集』の引用部分はほとんどなく、あったとしてもその記載順序が不規則であるため、このゾーンにおける両書の関係には、30番以降のゾーンとは別の状況が存在した可能性が高い。例えば、『相好文字抄』の17番「摩尼珠」という相好語は、『相好集』の51番の引用文である「【觀佛経第三云】……皆於中現了了分明。於圓光上有金色艶。如摩尼珠嚴顯可愛。……其光赫奕琉璃頗梨。備七寶色從佛足趺。副稱佛身如摩尼珠。亦如前光上至圓光。……一々菩薩。其頂上生摩尼珠光。…」の中に三箇所記載されているため、一見、この「觀佛経第三」の箇所から引用されたように見える。しかしながら、この17番「摩尼珠」は、実際には、『觀佛経』の中の、『相好集』には引用されていない他の箇所から『相好文字抄』に引用されたと推測される。なぜならば、

『相好文字抄』の17番「摩尼珠」、18番「跓腋」、19番「脇肋」の一続きの相好語が、これと同じ順序で列挙してある箇所が『觀佛経』の他の箇所には存在するからである。その箇所とは同経巻第一である。

『觀佛経』巻第一の中には「……自有衆生樂觀如來腋下滿相。於其相中懸生五珠。如摩尼珠上跓佛腋者。自有衆生樂觀如來臂纎圓如象王鼻者。……自有衆生樂觀如來脇助。大小正等……」とある。『相好集』が仮にこの部分を引用していたならば、『相好文字抄』の17番「摩尼珠」だけではなく、18番「跓腋」、19番「脇肋」ともよく一致したはずである。

このような点から、『相好文字抄』の29番までの相好語に該当するゾーンにおける両書の関係は、30番以降のゾーンにおけるそれとは別の状況が存在したと考えられるのである。ただ、残念ながら、それがどういう状況であったかは現時点では不明である。

（三）については、以下のようである。

前稿でもふれたが、三十二相と八十随好は、ある特定の仏典のみに記載されているのではなく、多様な仏典に記載されているので、『相好文字抄』や『相好集』が様々な仏典から相好語を適宜抜粋して列挙する際、『相好文字抄』と『相好集』の相好語の出典が相違しても何ら不思議ではない。にもかかわらず、『相好文字抄』記載の相好語の出典は、両書どちらにも記載された相好語（百十三語）のうち七語（『相好文字抄』の20番「伽論（瑜伽論）云、項脊」、22番「同経（大般若）云、洪滿」、23番「伽論（瑜伽論）云、僂曲」、74番「又（百福経）云、婉麗」、75番「又（百福経）云、含萃」、88番「同経（觀佛経）云、丹暉」、89番「同経（觀佛経）云、如頻婆菓」）を除いた百六語において、『相好集』の出典と一致する。その割合は約九十四％にのぼる。

しかも、例外となる七語のうちの四語（『相好文字抄』の74番、75番、88番、89番）は、実は『相好文字抄』の誤写と思われる例である。例えば、『相好文字抄』の74番「又（百福経）云、婉麗」、75番「又（百福経）云、含萃」の二語は『百福経』本文には記載されておらず、『相好集』に「説無垢稱經疏……大師釋云」とあるとおり、実際には『説無垢稱經疏』の当該部分と一致している。同様に、『相好文字抄』の88番「觀佛経云、丹暉」と89番「觀佛経云、如頻婆菓」の二語は『觀佛経』本文には記載されておらず、『相好集』に「大般若経云」と記載されているとおり『大般若経』巻第三百八十一の第二十八随好と一致している。(7)

なお、残りの三語のうち二語は間接引用であり、事実上一致する例である。

すなわち、『相好文字抄』の20番「項脊」は、『相好集』では264番「最勝疏略頌曰〈此随好頌依瑜伽論〉……脇腋乳為六腹脚項脊……」と記載されているとおり、形の上では「最勝疏（『金光明最勝王經疏』）」から引用されているように見えるが、「依瑜伽論」とあることから、実際には『金光明最勝王經疏』を介して『瑜伽論』から間接的に引用されていることになり、事実上、一致する例である。

同様に、『相好文字抄』の23番「僂曲」は、『相好集』では261番「最勝王經溜洲疏第三云……瑜伽開第十八洪滿端直爲身不僂曲……」と記載されているように、「最勝王經溜洲疏」（「溜洲」は「淄州」を指していると思われる。淄州は淄州大師慧沼。『金光明最勝王經疏』の著者　筆者注）中の「瑜伽開（瑜伽派がいう）」、つまり『瑜伽論』からの間接引用であることがわかる。[8]

ただし、これら二語が収録されているゾーンにおける記載のありかたは、前述のとおり『相好文字抄』30番以降のそれとは大きく異なっているため、それらと同一には扱えない。

以上の検討を加えると、『相好集』における記載のありかたが均質的な『相好文字抄』30番から137番までに該当する相好語の出典の両書の一致率は約九十八％（百八語中、「×」の81番・82番の二語を除く百六語）と極めて高いことがわかる。すなわち、『相好文字抄』記載の相好語の出典である仏典と『相好集』のそれとは、冒頭の一部を除いてほとんど一致しているということである。

これらのことから、『相好文字抄』と『相好集』は、その収録相好語・配列順序・出典において強い一致を見せており、密接な関係を有していることがうかがえる。『相好集』が相好に関わる文章の一種の「アンソロジー」であり、他方、『相好文字抄』が相好語に逐語的な注釈を加えた書（仏典辞書・相好語辞書）であることを考慮すれば、『相好集』が『相好文字抄』に先立って編纂され、『相好文字抄』撰者は、その序数30番以降の相好語を、『相好集』の当該部分を順に見ながら適宜拾い上げたという状況が推定される。すなわち、『相好文字抄』と『相好集』とは姉妹本の関係にある蓋然性が極めて高いということである。

四、『相好文字抄』と『相好集』の撰述背景

この結論は、両書の撰述背景とも矛盾しない。

『相好文字抄』『相好集』両書を蔵している来迎院は、魚山大原寺ともいい、天台宗に属し、融通念仏の祖であり天台大原魚山声明を中興した人物としても著名な良忍（一〇七二～一一三二）が一一〇九年に再興した寺である。良忍は、この来迎院に阿弥陀仏と釈迦の二尊の像を安置し、経蔵を建立して如来蔵と号した。如来蔵には大蔵経律論がおさめられており、良忍が自ら書写した『法華玄義』や『摩訶止観』などの天台文献の筆写本が残っている。また、この如来蔵には学僧が住んでいて教学につとめていたという。[9]当時は、末法思想が広まり、貴族から民衆に至るまで阿弥陀仏信仰が盛んであった。具体的には、阿弥陀仏の相好や極楽浄土の具体的な様相を観想し、仏の功徳により罪障を滅することによって往生を目指すための念仏業が広く行われた。[10]人々は阿弥陀仏をひたすら念ずることで極楽往生を祈願し、その念仏の実践として常行三昧・仏立三昧と呼ばれている修行が行われたのである。

比叡山周辺で発達した浄土教は叡山浄土教ともいわれているが、良忍以前の人物でその叡山浄土教の組織と体系を樹立し大成

した人物として源信（九四二〜一〇一七）の存在は重要である。[11] 横川に隠棲した源信は周知のように天台宗の立場から念仏業を包括して位置付けようとした。源信は、四十四歳の時に著した『往生要集』で念仏往生を説き、[12] また『観心略要集』を著して念仏成仏の道を示した。とりわけ『往生要集』はその後の浄土教に多大の影響を及ぼしている。源信は『往生要集』完成の翌年に「二十五三昧会」なる念仏結社を作り、そこで『往生要集』の念仏理論を実践した。彼が創建したと伝えられる三千院本堂には、阿弥陀三尊が安置され、本尊の周囲を行道できるような常行堂が作られたともいう。

このように天台の念仏業を受け継ぐ『往生要集』と『相好文字抄』『相好集』とが共通の思想的背景を有していた可能性は高い。[13] つまり、浄土信仰の延長線上にある念仏結社の実践や念仏の教義上の必要性から『相好文字抄』や『相好集』のような相好に関する典籍が作られたと考えられるのである。[14]

五、結語

本稿の結論をまとめれば以下のようである。

1、来迎院には『相好集上（相好集）』なる典籍が所蔵されており、『相好文字抄』と同様に大治四年書写の識語がある。この典籍は、阿弥陀仏をはじめとする諸仏の相好に関する文章を諸仏典から引用して身体的特徴毎に分類した相好のアンソロジーだと考えられる。ただし、三十二相と八十随好の全ては引用されておらず取捨選択が行われている。

2、『相好文字抄』の相好語と『相好集』の相好語とを比較すると次の事実があることがわかる。

（1）『相好文字抄』に記載された相好語は、『相好集』に記載されたそれと、冒頭部分を除くほとんどが一致する。

（2）『相好文字抄』『相好集』両書に記載されている相好語の、『相好集』における配列順序は、冒頭部分を除くほとんどが『相好文字抄』の配列順序に沿った昇順となっている。

（3）『相好文字抄』『相好集』両書に記載されている相好語の依拠した仏典も、そのほとんどが一致する。

（1）〜（3）の事実があることから、『相好文字抄』は『相好集』を参照して成立した典籍である蓋然性が高い。

3、『相好集』『相好文字抄』両書の撰述には、当時の横川周辺の叡山浄土教および阿弥陀仏信仰そしてその実践の一つである念仏業が深く関与していると推定される。それ故両書はそろって「相好」の書名を持つと考えられる。

注

（1）南部忠明・河野敏宏「来迎院如来蔵所蔵の『相好文字抄』について」（『愛知学院大学教養部紀要』第六七巻、一・二号合併号、二〇二〇年）。

（2）佐藤哲英『叡山浄土教の研究』（百華苑、一九七九年）には、『相好集』、『相好文字抄』各々の奥書部分の紹介および若干の解説が述べられている。奥書部分以外の解説として「特に、『相好鈔』（ママ）には西方願生の信仰あふるる奥書は見られるが、その内容は広く仏の相好に関説された百四十種ほどの経論釈の名をつらねたもので、阿弥陀仏の相好に関する文献ではないことがわかった。」とある。

（3）識語の解釈については、西原一幸氏を通じて伊井春樹氏の御教示をえた。なお、『相好集』（正確には『相好集上』）という書名は、『来迎院如来蔵聖教文書類目録』（文化庁文化財保護部美術工芸課刊）中には記載されていない。しかし『昭和現存　天台書籍総合目録　上　増補版』（昭和五十三年、法蔵館）には、『相好抄上』なる典籍が見える。同目録に収録されている『相好抄上』なる典籍の解説にある奥書きと『相好集上』の奥書きとを比較すると、撰者の名が異なっている以外は書了の年月日等、どれも同じである。両者の違いを具体的に述べれば、次のようである。『天台書籍総合目録』では「覺運」撰と記載されているのに対し、『相好集上』では「運覺」と記載されている。同目録に記載されている「覺運」は良源に師事して台教を究め、檀那流の祖とされる人物であり、天台宗の僧侶としてはつとに有名である。これに対して、『相好集上』の奥書にある「運覺」なる僧侶は少なくとも天台宗の血脈には記載されていない。しかしながら、同時代に醍醐寺に同名の真言宗の僧侶が存在する（『本朝高僧伝巻五十一』、『本朝新修往生伝』）。例えば『本朝新修往生伝』には、「沙門運覺者。醍醐寺之僧侶也。…自書一切経。其後三十年。且書二千巻。又三時行業。多年不怠。康治二年（一一四三年　筆者注）春二月日。行法如恒。日中時没。……」とある。宇都宮啓吾によると「醍醐寺蔵『伝法灌頂師相承血脈』には運覚の名が真言宗小野流の金剛王流の中に確認できる」という（「聖教調査におけるデータの整備を巡る問題――「念仏宗僧運覚」・書誌情報を中心として――」www.orcaland.gr.jp/~utsunomiya/syoko/ronbun/data-seibi.pdf）。ただし、この人物が『相好集上』の撰者と関連があるかどうかは現時点では特定できない。このように撰者名において疑問点は残るが、その他の内容がすべて一致することから、『天台書籍総合目録』に収録されている『相好抄上』は『相好集上』とみて間違いなさそうである。

（4）中村元『仏教語大辞典』（東京書籍、一九八一年）。

（5）『相好文字抄』には「大治四年九月九日未時計書畢」とあり、『相好集』には「大治四年九月十日午剋書了」とある。なお、この日付は書写完了日であり、編纂完了日はこれ以前と考えられる。

（6）『相好文字抄』の2番「有白毫相」、3番「如覩羅綿」、4番「逾珂雪等」、17番「摩尼珠」、20番「項脊」、22番「洪滿」、23番「僂曲」、134番「随轉」の八例。これらの例に該当する『相好集』引用文の序数には＊を付した。

（7）「SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース2012」の検索結果による。

（8）ちなみに『相好文字抄』には20番、23番も含めると計九例が『瑜伽論』から引用されているが、129番から131番までの一続きの三例は、『相好集』に記載されているとおり『瑜伽論』巻第三十七から引用されている。残りの六例は、前述した『相好集』末尾の「三十二相盡大般若経第三百八十一、瑜伽論第四十九之所説。」の記載のとおり、『瑜伽論』巻第四十九からの引用である（「SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース2012」の検索結果による）。

（9）佐藤哲英「叡山浄土教における良忍上人の地位」（『良忍上人の研究』所収、融通念仏宗教学研究所編、百華苑、一九八一年）、横田兼章「大原如来蔵における良忍上人関係資料」（『良忍上人の研究』所収）、築島裕『古代日本語発掘』（学生社、一九七〇年）。

(10) 高田修は観仏および念仏について以下のように述べている。「観佛すなわち観佛三昧とは、佛身について観相する禪相の謂いである。また念仏と同義的にも用いられるが、後世口稱念佛と観念念佛すなわち観佛とが区別されるに至った関係もあり、ふつう観佛といえば、佛の色身、従ってその相好を観想する三昧を指すものと了解される」、「観佛の初歩の階梯として観像（実際に仏像を見ること、筆者注）から入り次いで心眼を以て佛の相好を観想して、次第に次元の高い観佛の段階へ進むのが常法であったのである」（『仏像の起源』、岩波書店、一九九四年）。つまり、観仏の初歩段階では、様々な相好を備えた阿弥陀仏の像を実際に詳見し、その後、その仏の相好をひたすら観想したのである。また、須藤弘敏も見仏や相好業との関係から当時の隆盛をとらえている（『阿弥陀聖衆来迎図』、平凡社、一九九五年）。

(11) 佐藤哲英　前掲論文、中村元・福永光司・田村芳朗・今野達編『岩波仏教辞典』（岩波書店、一九八八年）の「源信」の項、速見侑『人物叢書　源信』（吉川弘文館、一九八八年）など。

(12) 石田瑞麿は「『往生要集』の肝心は第四章「正修念仏」にあるが、なかでもこれを五門に分けて説いた第四「観察門（仏の姿を正しく観察する実践、筆者注）」がその要であることに疑問の余地はない。さらにここで扱われている問題の中心は「観察」という阿弥陀仏の観想にあって、内容をなす「別相観（仏の相好の一々を観想すること、筆者注）」「忽想観（仏の相好を総括的に観想すること、筆者注）」「雑略観（特定の相好に限って観想すること、筆者注）」と総括している以上『往生要集』は、観想念仏を説こうとする意図のもとに書かれたといっても過言はないだろう」と述べている（『往生要集（下）』文庫解説、岩波書店、一九九二年）。

(13) 例えば、『往生要集』巻中の観察門の項目には「相好」に関する以下のような記述がある。「……五、額広平正、形相殊妙、六、面輪圓満、光沢熙怡、端正皎潔、猶如秋月、雙眉皎浄、似天帝弓、其色無比、紺瑠璃光、七、眉間白毫、右旋宛転、柔軟如兜羅綿、鮮白逾珂雪、……」（『大日本仏教全書』第三十一「往生要集」五六頁）。この箇所は『相好文字抄』『相好集』に記載されている相好語と重なる部分もある。

(14) 例えば、小島裕子は仏の三十二相について以下のように述べている。「天承元年（一一三一）の論議の場で、「問ウ、如来三十二相中、鼻舌ノ二根立テルヤ」に対する答えとして、「答ウ、三十二相中鼻舌二根立テズ」という問答があった事例が見え、仏の三十二相が経典論議の場に於ける教学的問答に上がるテーマになっていたであろうことが当然の如く察せられる。」（仏『三十二相』の四季――教化することばの世界から――」季刊『文学』8巻4号　一九九七年　岩波書店）。ここでは『相好文字抄』『相好集』が撰述された同時期の経典論議の場において、仏の三十二相が教学的問答として問われていたことが知られる。さらに、小島は「声明『三十二相』は、仏の優れた三十二相が七言の長詩型で唱えられ、この偈文の後、讃仏の功徳を説いた回向句によって結ばれる。讃嘆は仏の頭頂の髻の盛り上がりを表す「烏瑟膩沙無見相」から始まり、……最後に足裏の「足下平等等触相」に至る。……こうした声明曲「三十二相」が唱えられ、続いて如来の妙相を唱える仏名があり、大導師により三十二相の教化が独唱されたのであった」と、修正会（法会　筆者注）の場において、声明曲「三十二相」が唱えられたことを指摘している。

　また、佐藤道子は、修正会における声明曲「三十二相」の重要性について、「『小右記』永観三年（九八五年）正月一三日の記述」から『三十二相』（声明曲　筆者注）は、悔過会（円融院での修正会　筆者注）において、二時型悔過会の眼目ともいうべき『大導師作法』の構成要素の中で、最も荘厳性の濃い一段であり、のみならず『悔過作

法』そのものを象徴する意義を担うとさえ想定し得る一段である」（『悔過会と芸能』法蔵館　二〇〇二年）と述べている。さらに、佐藤は同書において「声明としての［三十二相］は、その三二の瑞相を具体的に連ねて三二句で構成し、末尾に四句または八句の回向句を添える長大な一曲であり、現在は拍節的な唱法を用いる例が多い。……［三十二相］を構成要素とする［大導師作法］の伝播は、広範囲かつ多くの宗派におよぶ。しかもその条件の下で長い年月を経てきたにもかかわらず、諸事例間の詞章の異同はごく少ない。それは、［三十二相］がしかるべき規範に基づいて成立したことを示しており、その典拠もすでに指摘されている。……ただし、三二の相好を具体的に掲げる経典は必ずしも多くはないし、掲げられた相好の表現や順序にも全く統一はみられず、なによりも声明の［三十二相］の詞章と合致する表現を見出すことができない。」と述べている。さらに、「［三十二相］の詞章の典拠を経典以外に求めて指摘されてきたのが、天台宗［例時作法（常行三昧）］の一部である［五念門］の第二段〈讃嘆門〉の詞章である。［五念門］とは、阿弥陀浄土に生まれるための行を五段に分けて述べる偈文であり、〈讃嘆門〉は仏を念じてほめたたえる一段である。この段では、如来の三十二相を一つひとつ唱え挙げ、最後に回向句八句を添える。その詞章を「大導師作法」の［三十二相］と比べると、末尾の回向句の詞章の一部に異同があるけれども、それ以外は〈讃嘆門〉の詞章に則しており、「大導師作法」の［三十二相］の典拠が、［例時作法］の［五念門］であることは疑いない」と述べており、声明曲「三十二相」の典拠を［［例時作法］の［五念門］］としている。

以上の如く、仏の三十二相は、「論議」のみならず「法会」、天台宗［例時作法（常行三昧）］においても重要なテーマとなっているのであり、このような宗教的背景のもとに、相好に特化した『相好文字抄』『相好集』が編纂されたと考えられる。

なお、『相好文字抄』と『相好集』とが天台大原魚山声明の中興の祖である良忍の存命中に書写されていることから、声明曲「三十二相」と『相好文字抄』、『相好集』との関連も考えられなくもないが、少なくとも声明曲「三十二相」における相好の順序と『相好文字抄』『相好集』の相好の順序は全く一致しない。

（付記）本稿は一九九六年五月の訓点語学会（於青山学院大学）で発表した草稿に加筆訂正を加えたものである。なお、本稿をなすにあたっては、西原一幸氏から貴重な助言を頂いた。記して深く感謝申し上げます。